慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	國民の日本史 安土桃山時代, 西村眞次著
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.1, No.4 (1922. 8) ,p.138(616)- 139(617)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	東西新史乗
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19220800-0138

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

東西新史乘

國民の日本史　安土桃山時代（西村眞次著　早稻田大學出版部）

誰であつたか、近代に於いて歴史は歴史家の手をはなれて文學者の手にうつつたと言つて、最近世界に評判の H・G・ウエルスの世界史概觀のごときに暗にあたつてゐた。この評言はもちろん皮肉のためであつたらうが、しかしかかる傾向は近代人の歴史に對する要求を示すのである。單に考證をもつて能事終れりとした從來の歴史は、あまりに無味乾燥であつた。活ける人間の歴史は、血のある描寫を要求する。具體的表現を得るためには、當然藝術に向はねばならぬ。歴史が藝術にちかき學問であるとは、現在すでに多くの人々の承認するところである。

本書の著者が其の序言において、研究は科學的で、その表現は藝術的であらねばならぬこと、その表現に象徴化の必要であること、そのためには史實の單純化のみならずその複雜化も必要なること、かかる表現の技巧は天才をまつて初めて望まれうることを述べてゐるのは、われらの全然同感するところである。がなほ進んで著者の理想とするところは、繪畫的表現、むしろ活動寫眞的表現であつて、『過去から現在に流れ、一點から他點に移つた「時」と「處」とを「人」に絡めた歴史の表現法は……主として象徴を用ひ、それを動的に描寫しなければならぬ……』となし、近世藝術の理想境は一點に全生命を呼吸せしめるやうな手法の獲得であつて、歴史家もそれを捉へなければならぬ破目に陷り、こゝに歴史改造の機運が横はると言ひ、かかる抱負をもつて本書が書かれたのである。そして書中殊に著者の努力したのは、『民衆生活、社會相、時代思想といふやうなものを、社會學的見地から觀て、藝術家的手法で描寫しようとしたことである。』

かかる著者の主張と表現方法とを知つて本書を讀くならば、充分著者の苦心と、しかもその企圖の可なりの成功とを看取することができる。安土桃山時代は、日本歴史に於いて國民的活動の最も旺盛なりし、從つて最も興味ある時代の一つであるが、著者はこの時代を叙するにあたつて、まづ一般社會相からときおこしつつ、當時の一切の社會的事象を信長、秀吉の二大英雄の出現のうちにこめしめ、すべてを背景となして、この二大英雄の人格とその活動とを鮮明ならしめ、かくて象徴化による立體的表現を試みた。

つぎに著者は從來の歴史家によつてあまり試みられなかつた心理的解明を施して、二大英雄の人格を具體化しようとした。この點において信長の辯護論のごときは殊に特色あるものである。一般に信長が峻嚴で、時として殘忍であつたやうに考へられるの

は、あまりに嚴正にすぎ、且つその最期が悲劇であつたからで、むしろ彼の胸中にはすべてをうるほす春雨のやうなしつとりした慈悲心の宿つてゐたこと、彼は眞面目すぎるほど眞面目であつたが、他方においては滑稽を滑稽と感ずる樂天的分子のあつたこと即ち嚴肅と輕快の兩面をそなへてゐたこと、しかし光秀の如き狹量のものに嫉み怨まれたのは、後年あまりに明察であつたからであること、要するに彼は一種神經質的膽汁質の氣質の人であつたことその他彼が趣味の人であつたこと、きはめて吝嗇であつたこと等の長短所をあげて、信長の人物に深甚の同情をそそいでゐる。（三〇八——九、及び三二三——三二二頁）

が信長の辯護はよしとして、秀吉論に於いて彼を信長の追隨者繼承者、再造者にすぎなかつたとのべ、信長をもつてその能力の點に於いては、或は秀吉以上であつたと思はれると言つてゐるのは（四二八、六一一——六一二頁）、いかがであらうか？　たとへ秀吉の政治的事業が前代の繼承であつたにしても、それは單に形式的方面に於いて言はるべきであつて、もちろん事業の成否によつて人物の大小を批判するを得ないが、われらは人物の點に於いてやはり秀吉の方により大なる吸引力を認める。

ついでに一言したい。第一章第五節武士階級の生活狀態において、室町末期に自己擴張、自己解放の運動がさかんであつたことを言つて、『傳統が束縛した自己を、それ自身の實力によつて解放しようとすると、そこに社會制度の破壞がなければならなかつた。社會制度の破壞——夫が室町末期に於ける武士階級の人々の懷いて居つた夢想であり、その夢想を實現しようとして、彼等の多くは煩悶し、懊惱し、努力した』とのべ、かかる時代を「下剋上の時代」と呼び、その運動による成功者を「階上者」、しからざるものを「逼下者」、と呼ぶと言つてゐる（六二頁）。しかしかかる下剋上の狀態をもつて直ちに社會制度の破壞といひ得らるるだらうか？　下剋上の現象はすこしも武士階級の崩解ではなかつた。社會における支配階級の交代ではなかつた。政治的、經濟的組織の一變ではなかつた。著者自身言つてゐるやうに、『彼等の社會的組織は、下の者が上に剋ち、上の者が下の者に代つても、その地位が轉倒したといふだけで、大體の組織には大した差異がなかつたのであつた』（七四頁。）また著者は屢々革命といふ語を用ゐてゐるが、この場合當然政治的、もしくは社會的革命を指示しなければならぬのであるが、何等政治的及び經濟的組織の一變を伴はない單なる地方的戰爭に對しては、これまた用語の妥當性を缺くものではなからうか？

最近國史に對して新著述のさかんに公にされることは誠によろこばしいことである。本書は『國民の日本史』の第八編として最初に公にされたものであるが、わが史壇における尊き收獲であり、今後續刊さるべき各編いづれも本書同樣に價値あり興味ある眞の國民史たらんこと期待してやまない。（松本芳夫）

日本文化史　古代（古藤正次著　大鐙閣發行）

こは本年四月日本文化史叢書の第一卷として公にせられたものである。

著者は本書の序文に於て「民族の文化、國民の文化は民族國民